歴史総合-DX

**1862年（文久2）　幕府の京都移転**

「第一回遣欧使節」（開港延期交渉使節団）が初渡欧した1862年、国内で1月早々に今度は江戸城の坂下門外で水戸浪士を中心とする尊攘派が、公武合体論の和宮降嫁の立役者だった老中・安藤信正を襲い負傷させる事件（坂下門外の変）が発生した。「公武合体」の証 （あかし）とし、14代将軍の徳川家茂が、大阪城入りするため、大阪城代・京都所司代を統括する京都守護職が新設された。事実上の遷都で京市街の守護には、かつて将軍として京の地に初めて足を踏み入れた3代将軍・徳川家光とゆかりのある会津藩（初代藩主の保科正之は第2 代将軍徳川秀忠の子で、家光の異母弟）から会津藩主の松平容保（かたもり）が金戒光明寺（こんかいこうみょうじ）に屯営を設置して警戒の任にあたった。この年、薩摩藩では遠島処分の西郷隆盛が帰藩したのに続き、薩摩藩士が神奈川の生麦村で外国人を殺害（生麦事件）、また、吉田松陰の門下生の長州藩の伊藤俊介（後の伊藤博文）・志道聞多（後の井上馨）らの下級藩士が江戸・品川の建設中のイギリス公使館を襲撃する事件が勃発した。